

### 支部教宣部総括会議 & 学習会

# 「事実」を正確に把握を！

11月22～23日、支部教宣部総括会議・学習会を開催し、教宣部員6名と『新聞うずみ火』代表の矢野宏さん、そして組織強化担当の私を合わせて8名が参加しました。

はじめに教宣部体制の役割確認、次号機関紙の内容確認、次々号および2026年新年号の企画を討議しました。

その後矢野さんによる学習会「機関紙の役割—知ったら伝える責任がある」を受けました。矢野さんが語る『新聞うずみ火』の基本姿勢は、むのたけじさんや黒田清さんが貫いた「権力の側に立たない」「誰が泣いているのか、泣いている人の横に立って見る」という精神そのものです。読者の顔が見える新聞、読者とのキャッチボールこそが命だと改めて教えられました。

最新の『新聞うずみ火』から、特に衝撃的だったのは、11月7日の高市早苗大臣の「戦艦を使い、武力の行使が伴うのであれば、どう考えても存立危機事態になり得る」という発言が、事実上、集

团的自衛権の行使を容認する危険な発言であるという指摘でした。私自身、この発言の重みをその場まで十分に理解できていませんでした。大分市では現在、陸上自衛隊敷戸弾薬庫に大型弾薬庫9棟が増設される計画が進んでいます。半径3km以内には大学・小中学校・保育所・幼稚園・病院・介護施設があり、約2万世帯・4万人の市民が暮らしています。6km圏内には大分市役所・県庁・大分駅も含まれます。

さらに、湯布院駐屯地には九州・沖縄方面の地对艦ミサイル部隊を統括する西部方面隊第2特科団が駐屯し、日出生台（ひじゅうだい）演習場（4900ヘクタール、西日本最大）では年間330日（うち230日は実弾）の演習が行われていることも報告されました。これらの事実は、まさに「有事には大分が最前線になる」ことを示しています。

最後に、絵本『二番目の悪者』を教材に、NHK党・立花党首の逮捕事案やSNS上のフェイク・デマ・誹謗中傷の問題を扱いました。

私自身、つい最近このテーマで学習会講師を務めたばかりだったので、矢野さんが同じ題材を取り上げられたことに驚きました。



近年、ネット・SNSではフェイクニュースやデマが真実のように信じられ、大きな影響を与えています。ナチス・ドイツのゲッベルスが実践した「嘘も100回繰り返せば真実になる」というプロパガンダ手法は、今も形を変えて生きています。マサチューセッツ工科大学の2018年研究では「偽情報は真実の6倍の速度で拡散する」ことが科学的に証明されています。

公人・政党が使う「日本人ファースト」といったスローガンも、差別・排外主義を無意識に広め、正当化する土壌を作ります。エコチェンバーやフィルターバブル（どちらも情報が偏る現象）は、職場・学校・地域に、分断と対立を深刻化させます。

高市発言の真意も、弾薬庫増設の危険性も、私たちはまず「事実」を正確に把握しなければなりません。フェイクや差別に惑わされず、事実に基づいて対話し、連帯していくこと。それが今、私たちに突きつけられている責任です。

（副委員長 吉本 賢一）

## 原発・核燃からの撤退を！

# 核と人類は共存できない

11月22日、約300人が参加して「原発・核燃からの撤退を！ 巨大地震と津波の前に！ 2025関西集会」



西集会」が、ドーンセンターにおいて開催されました。

青森で弁護士をしながら核燃サイクル阻止1万人訴訟原告団代表をされている浅石紘爾さんから、「再処理はエネルギー問題ではなく、核のゴミ問題にすぎません。原発同様、最終処分場なき無駄で危険な化学工場というのが六ヶ所再処理工場の実体です。再処理は、溜まり続ける使用済核燃料を減らし、原発を延命させる道具です。しかし、原子力回帰に舵が切られ「フクシマ」の再現が憂慮される事態となっています。今こそ原発と再処理廃止の声を高めて、この難局を乗り切って原子力に頼らない社会を実現しようではありませんか」と訴えました。

また、立憲民主党の山崎誠参議院議員の「六ヶ所再処理工場の問題に迫る国会の議論から」では、経済産業委員会や原子力問題特別

調査特別委員会での質問と答弁の報告と、超党派で使用済核燃料再処理問題議員連盟を立ち上げ、原

発回帰の政策の見直しを迫ると述べました。

### 涙を流すおとくさんに心を打たれた

加藤登紀子さんの「核の時代80年の歴史」では、キエフ（チェルノブイリ原発地）の視察や、福島に何度も足を運び核の恐ろしさを再確認し、はだしのゲンの一節の朗読、ロシアのウクライナ侵攻などを話されました。そして「100万本のバラ」「イマジン」を歌い、「あきらめないで人の心の窓を開けよう！希望を込めて」と反戦・反核を訴えると、参加者もハンカチを手に取り聞いていました。

### 核燃サイクル政策は破綻寸前

日本の核燃サイクル政策は、使用済核燃料を再処理し回収される



プルトニウム、ウランを取り出し、MOX燃料として再利用することです。しかし、使用済核燃料からプルトニウムやウランを回収することを目的とした六ヶ所再処理工場は、1993年に着工したが安全審査など多くの課題により、完成が27回も延期されています。代替案とされるプルサーマル計画も実施されている原子炉は4基のみで、使用済MOX燃料は再処理ができず貯蔵され続けることとなります。

このように核燃サイクル政策は破綻寸前で、海外でも直接処分に転換している国が増えています。

今年10月に誕生した高市首相は、安保3文書の改定と非核三原則の見直しを考えています。しかし、核廃棄物の無害化は10万年かかると言われています。「核と人類は共存できない」の理念を実現させ、負の遺産を残さないように、核は廃絶しないと叫びたいと思います。みんなで声をあげましょう！

（書記次長 関谷 和人）

